

Future of Radiology ~放射線学の未来を垣間見て~

久留米大学病院 松竹 裕紀

はじめに、今回参加させていただいた海外研修での経験は、1週間という短い期間であったが、今後の仕事や研究に対する考え方を大きく変えるものであった。さらに、全国各地から参加された研修生の方々との毎日の共同生活を通して、忘れられない経験を研修生全員で共有することができたと思う。

私が今回の研修に応募した一つ目の目的は、最新のMRIの技術や分子イメージングを学び、一流の研究に触れることがあった。最新のMRIの技術として、最も印象的であったのは、個人の思考や人間性をfunctional MRIやConnectome画像を用いて、画像上で可視化することが可能となるであろうということだ。これにより、近い将来、われわれ技師の働く環境は、病院のみならず、ビジネススクールなど様々な領域に広がっていく可能性がある。私たち技術者は、医療の分野だけにとらわれるのではなく、さまざまな領域に目を向け、常に新たな創造をしていかなければならぬというMoseley先生の言葉を聞き、身が引き締まる思いであった。一方、分子イメージングは、今後の放射線学を担っていく重要な分野であると考えられている。現在は、超早期にがんなどの疾患を発見するだけでなく、炎症や痛み、ストレスの程度を把握することができる分子プローブが開発されつつある。これまで、主観的で定性的な評価しかできなかった痛みや、ストレスの程度を画像化できれば、診断や治療法の選択に大きく寄与するのではないかと考える。本研修において、世界最先端の研究やアメリカの臨床現場に触れることで、現在の自分を客観的に見つめなおす良い機会となった。さらに、日常行っているCTやMRIなどの業務内容は、アメリカにおいても共通している点があるということを再認識することができ、今後の日常業務をより充実させていければと考える。

次に、二つ目の目的は、全国で活躍されている方々と出会い、交流を深めることであった。初めは緊張していたが、研修生との毎日の生活や、ディスカッションを通して、気軽に日常の些細な疑問を聞くことができ、お互いが刺激し合える関係にることができた。ディスカッションでは、アメリカのみならず、韓国の放射線技師の状況や、日本の技師教育について貴重な話を伺うことができた。この中で、日本の技師は、臨床と研究を共に行うため負担が大きいのではないかという意見もあった。技師の地位向上には、学位の取得はもちろん、病院においても研究と臨床の二層構造を構築し、それぞれの領域の技師が相互に関わっていくことが理想ではないかと考える。このような、研修生とのディスカッションの時間は、とても有意義な時間であり、今後も研究や臨床での疑問を気軽に相談し、常に刺激し合える関係を維持していきたいと思う。

今回の研修における予想外の収穫は、人の興味関心を引き付けるプレゼンテーションの方法を実際に体感できることである。講義を行っていただいたMoseley先生のプレゼンテーションはとても刺激的で、聞いていて、わくわくするような内容であった。このような、人の関心を引き、且つ、内容を正確に伝えることができるようなプレゼンテーション能力を身につけていければと思う。

最後に、本研修に際して多大なご尽力をいただいたスタンフォード大学、日本放射線技術学会、GE Healthcare Japanの方々、ならびに引率していただいた神戸大学医学部付属病院の京谷氏、そして研修への参加を快諾して頂いた久留米大学病院画像診断センター諸兄姉に心よりお礼申し上げます。



修了書を持ち Moseley 先生（右）との一枚